

方向

第一一五号 一九九〇年六月一〇日 京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内 方向社

歌人・大塚五朗 (六)

1990.5.21. 原田憲雄

小学校教員時代 (三)

一九二二年(つづき)五郎、二十五歳。

前号一三頁の歌の題の「小島」とあるのを「小鳥」と訂正する。

つきにかかげる「雪」は、詞書に離家独居をいうのでこの年に繋げるが、適當するかどうか。

雪

家を離れて独りわびしく住むに冬も遂に雪となりたり。

吾妹離れ我が子さかりて陸奥の小野の真冬を雪にあひけり

暮れいそぐ小野の冬田のたまり水凍らんとして空に耀うへ「う」は原文のまま

打ちわたす冬田の中の一つ松たちてきやく雪は降りけり

ききわけて母と寝(ぬ)るらんとし子を父さびるつつ思ふ雪の夜

ききわけて今か寝るらんとし子のその子の母も寂びてぬるらん

降り積める雪の河原に二つらの小鳥乱れてはるかなるかも

一つらの小鳥乱れて舞ひおつる雪野が原に陽は遙かなり

一つらの小鳥乱れて冬空のいよいよ深く雪をふくめり 〈山原四一〇〉

山居 夏日

八重山の侘居になれて寂しかも今は盛りの藤の垂り花

雨後の陽のさはかに青し夏草の借夫の小野に君と逢ひにけり（以下三首吉井二葉女と逢ひて）

夏草の瞳には寂しく打ち靡（ぬ）るれ別れて惜しき夕べなりけり

別れ来て心かなしも夏山の青の薄を噛めばにがかり

しつとりと七面鳥の歩み寄る庭の八角金盃（やつで）に霧はしたたり

しつとりと歩みは重き七面鳥朝の大地の濡れて寂しき

おのづから霧はれくれば七面鳥かなしく羽をひろげたるかも 〈山原 四一四〉

吉井二葉女は、「山原」「巻末手記」に、天野多津雄氏とともに「福島在住時代に深く内面生活に交渉を持つた人達」といい、「一生を通じての心の友達」という吉井八重子氏であろう。このひとは、本稿（4）に見える五郎を短歌に導いた友「Y」の、夫人らしく、当時は新聞記者だったようである。

夕 焼 の 海

大正十一年八月福島県相馬郡松川浦に遊ぶ。

朝蟬の声の鋭さ夏の日の空真青にはれにけるかも

満々と潮みち来れば海のを空の光をうかべたるかも

一条（すち）のみをはるばると漕ぎいでぬこの夕焼の海の真中

よく見れば舟に人あり舟と人あな赤々と光りたるかも （四十五）

このときは天野多津雄氏を訪問したようである。氏は師範の先輩で、やはり小学校訓導であり、夫人のなほ氏は松子夫人の親友だった。

吾 木 香

半沢みよし氏と相識り相別る。

別れなばいつか逢はれん人の世のかなしき誓なすことなけれ

秋草の青きがかなしひそびそと夕陽の丘に別れけるかも

吾木香咲きて明るき秋山に惜しき別れを夕べわがする

夕まぐれ潮の満ち来るかなしきよ浦曲（うらわ）の道をひとりかへれる

穂に出でてかなしき草の刈藎は夕べの風に吹かれてゐるも

十日まりの旅にうみはて今日かへる秋草山は目に親しけれ （山原 五十五）

半沢氏は歌人。

青 き 風 景

ひえびえと土に残れる夕明り竹ともづれてひそかななるかも （「ともづれて」は原文のまま）

たたなはる山の極みゆ流れたる川瀬を清み鮎あまた居る（穴原温泉二首）

穴原の温泉（ゆ）宿のあかりとろとろと河に流れて河鹿は鳴くも

秋雨の驟雨（しぐれ）は山を通るらし山ゆかへれる馬濡れて来ぬ

きりぎりす鳴くや浅夜の浅茅原月ながら降る雨のあかるさ

濡れさむき空のしたびの花芒たそがれるつつ物音もなし

夕まぐれ黍の畑の葉明りに鳴くとしもなきこほろぎの声

うらさびし秋も最中の落葉樹に葉をおとしつつ飛ぶ小鳥あり

わが家としいへば今宵もかへり来るこの安けさに似たる寂しさ

これの世に惜しき命をえまかせて惜しと思はず寂しき女（ひと）かな

痺れたる手枕ときて淋しもよ今は叛きし人も恋ほしく

おのづから口につきたる子守唄さびしや妻がうたふ夕暮（山原 五十六）

御

蔭

奴

（みかげまつり）

1990.5.25.

原

田

慶

この祭は、例年五月十二日、葵祭の三日前に、賀茂御祖（かもみおや）神社、すなわち下鴨神社に、祭神の霊を迎える神事で、祭神の賀茂建角身命と玉依媛命は八瀬御蔭山に降臨されたといわれ、その山に祀られている。

迎えの行列が午前十時に神社を出発するということだったので行ってみたが、行列はすこし早く出てしまつて見ることができなかった。帰ってくるのは午後三時半ごろになるといふ。一度家に帰り、午後三時ごろにふたたび行つた。御蔭通りからすこし入つたところの糺(ただす)の森の中にある第一摂社の河合神社に行列が到着するといふことである。神社の近くには女の人が数人、しゃがんで鉛筆と手帳を持って考え込んでいる。歌か俳句を作っているらしい。

石川や瀬見の小川の清ければ月も流れをたづねてぞすむ

の鴨長明は、この神社の弥宜の家系だといふ。

神社の門を入ると、かなりたくさんの人が日陰のほうに寄つて立っていた。塀際の本に、白い馬がつかがれて、傍で男の人が二人、話しながら馬を撫でたり、とんとんと叩いたりしてなだめている。以前はこの馬が八瀬の御蔭神社まで行つて、神霊を迎えてきたのだが、今は、行列が自動車でゆくので、白馬はこの神社で待っているのだらう。馬もたいくつしたのか首を振つたりして、駄々をこねているように見える。この河合神社の祭神も玉依姫であるが、こちらは神武天皇の母神であるといふ。下鴨本社が多々須玉依媛命と、三輪神社の活玉依媛命の三神は有名であるが、日本国内には玉依姫を祀る神社はたくさんあるらしい。玉依姫という名そのものが神に親しく愛されたことを意味しており、タマは神の霊、ヨリはその霊が人間に憑くこと。神に奉仕する巫女が超人間的なことを語り霊の力を現わしたので神として祀られたものであるといわれている。下鴨神社の多々須玉依媛命は、賀茂建角身命の娘で、上賀茂神社の別雷神の母である。玉依日子という兄があり、その子孫が上賀茂神社の神職

の賀茂県主氏だという。

三時半に近くなると、神社の人が出てきて、みんな神社の外へ出るように言われたようだった。神社の門の前の道に自動車到着するので、わたしたちはずっと退いて見ていた。間もなく帰ってきた自動車は、御蔭祭と書いた白い旗を二本立て、大きな錦の傘を荷台にかけて、車体には桂葵をたくさん飾った小型トラックだった。神官や氏子の乗った自動車も何台かあった。トラックから、白い布に包まれた玉手箱のようなものを捧げ持って、神官が河合神社の神殿に入ってゆく。どうするのかと思つて、わたしが垣根の隙間からのぞいたら、外に立っていた神官が、黒塗りの木の浅香をはいて、そろりそろりとわたしの方へ歩いてきた。気がついて、わたしがあわててひっこんだので、その人は黙って引き返して行つた。つまり神事を見てはいけないのである。同じ十二日の夜八時には、上賀茂神社でも、神の荒魂を迎える御阿礼（みあれ）という神事が行なわれるが、これは一燈もともさない闇の中の儀式で、誰も見る事ができない。御蔭祭も、終りには本社の神殿で神霊を迎える儀式があり、これも一般には見ることが許されない。

しばらく待っていると、神霊を移された馬が、錦の傘を背にかけられ、行列に守られて河合神社を出発した。本社までは五百メートルくらいあるだろうか。それほどの距離ではないが、途中で切芝の神事が行われる。ゆっくり進む行列の先回りをして待っているとやっと先頭の人が見えてきた。青い袍に足首をしぼった葛袴というものを着けて、たぶん隨身なのだろう。他の人もさまざまな烏帽子や冠に、直垂、狩衣、水干、浄衣などというものを着ている。馬を引く人と錦の傘をさしかける人、弓、太刀などの神宝を金櫃に包んで持っている人々は、白

衣着物に白い袴、白足袋にわらじをはいている。雅楽の人は赤い単衣の上に、白に緑の縫いとりのある闕服袍というものを着て、その中で笙や笛など楽器を演奏する人は、黒塗りの木の浅沓をはき、東遊びを舞う人は布の沓をはいていた。耳の横につけた黒い毛のような纒が顔を引き立てる。どの人も冠や帽子に桂葵の枝を飾っていて、行列は六十人かそれ以上もあつたけれど、男の人ばかりである。

若葉の間からこぼれるようにとどころに陽がさして、ひいやりと膚寒い。行列は、その場につくと、それぞれの役目に合わせて、地面に敷かれたわらの円座に腰をおろす人、椅子に座る人、木の長い腰掛けに並ぶ人などあり、神馬は、五色の幕の廻らされた屋根の中に入れられて、幕の間から首だけ出してみんなの方を見ている。行列の人が落ち着くと、白衣着物と袴にわらじをはいた人が前に出て、弓の入っている金襴の包みを、立烏帽子の人に渡し、その後すぐに雅楽の演奏が始まつた。和琴はどんな音がするのかと期待したが、あまり響かず、ただ糸をはじくような音がした。舞い人が六人並び、世話人が、その人達の腰にはさんであつた忘れ緒という、袍の腰から後に引く長いひれのような部分を伸ばした。東遊びが舞われるのである。赤を衿もとと袖口、袴の裾に少し見せて、白の袍には緑の紋様、忘れ緒を地面に引いて、楽に合わせてゆつたりと舞う。両腕を広げると二巾ある広いものが手をかくし、大きな白い蝶が飛ぶように美しい。笙や笛に合わせてうたう人の声がよく響く。神馬も黙って見ている。これほど季節にふさわしくうつくしいものが他にあるだろうかと思う。一曲おわると、肩を一方だけ脱いで、すこし装いを変えて、あと一曲を舞う。それは四十分ほどだったろうか、二曲を舞い終ると、また忘れ緒を腰に上げてはさみ、舞い人も楽器を持つ。夢から醒めたように見物がちよつとぎざぎざとする。

行列の来るより前から待っていた四歳くらいの、烏帽子に浄衣、黒塗りの浅香という出で立ちの美しい男の子が進みでて、狩衣姿の人から杖のようなものを受け取ると、楽人がみな神馬の前に立ち音楽をはじめ。もともとおりに行列を整えた人達が、神馬をまもりながらひきつづき楽を奏でて進んでゆく。赤い樓門をくぐって境内を進み神殿のある扉の奥へ入る。少しして用事のすんだ雑役の人と神を送りとどけた白馬が出てくる。その後は本殿で行われる神事だから、関係のない者は見ることが許されていない。ただ雅楽の音が聞こえてくるだけである。

この祭神の降臨されたという御蔭山とはどんな所なのだろうか。それが知りたいと思つて地図で調べてから、行つてもよいものなのかどうか、下鴨神社に電話でたずねてみた。男の人の声で「どうぞ参つて下さい」という返事だった。「叡電（叡山電鉄）に乗つて、八瀬遊園地で降ります。吊り橋を渡つてからしばらく南下すると山の登り口があります。ちょっと寂しい道ですが、男の足なら二十分もあつたら登れます。ただ神社には人がだれもおりませんさかい、気をつけて行ってください」と教えてもらった。寂しい道というのが気になったが、田舎では、たいてい神社は山の上の寂しい所にある。もし登るのが無理なら、山の姿と入り口だけでも見てこようと思つて、午後になってから出かけた。以前は下鴨神社から行列が歩いて神霊を迎えに行ったのだから、むやみに遠い所であるはずがないと考へていた。

出町柳から叡電に乗つて三十分ほどで八瀬遊園地に着く。そこは比叡山へのケーブルカーの始発駅と遊園地や釜風呂温泉などがある小さな山間の町である。遊園地はもと賑わつて水族館やおとぎの国めぐりの船やアシカショーなども興行されていたが今では人も少なく設備も減つて静かになっている。駅のすぐ外を流れる高野川の

吊り橋を渡り、対岸を南下する。料理旅館や人家が山の木々に埋もれるように点在するが人影は見えない。道のあるままに歩いて行くと、療養所風の病院があり、いくつも建物があつて、特殊な施設といった感じがした。そこで草むしりをしている人があつたので、たずねてみると、すぐ後の小高い山を指して「ああ、あれがそうです。あれが御蔭山で、山の上に神社があります。この道をまっすぐに行くと三叉路がありますさかい、いちばん左の山寄りの道を登って行ってください。ずっと行くと赤い鳥居がありますので分かると思います。こんなところをあんたよう知ってはりますな」と言われた。下鴨神社でたずねたと答えると、なるほどと納得したようにその人は笑つた。

お礼を言つて、まっすぐに行くと、三叉路といつても、右の二筋はどちらも病院の施設へ降りるのだから、道は一筋のようなものだつた。山に入ると杉木立の中で、ひいやりとす暗く、しんかんとしているが、すぐ外を電車の線路が走っているし、その向こう側には遊園地の大きなプールがあるので、夏はもっと賑やかなのだらうと思う。途中で直角に折れて左へ登る。しばらく行くと、赤い大きな鳥居が見えた。さすがに立派なものだと感心して近づくと、御蔭祭のときの賢木（さかき）が白い幣を下げて、鳥居に結びつけてある。道はまっすぐに続いている。神社は左へ折れて鳥居をくぐり、山の上へ行くらしい。杉や桧が茂つてうす暗く、鳥のさえずりがかん高く響いている。この先どこまで行くのだらうと辺りを見まわしたが何も無い。もう少し行つてみよう、鳥居をくぐつて坂道を登つていった。道は谷川のような山土で、陽が射さないから湿っている。何かを引き摺つた轍の滑つたような跡がついている。御蔭祭の時についたものだらうか。思ったよりも早く小さな燈籠が一对見

えて、石段があつた。それを左へ登るとそこは広くはないが平らな明るい場所、陽が射して小鳥の声までが可愛いらしく聞こえる。流れ造りの社殿が二つ並んで垣根がしてあり、他には何も無い、神の鎮座する所である。説明の立札によると、

この社地は、太古鴨の大神が降臨された所と伝えられているところから御生（みあれ）山と呼ばれており、東山三十六峰第二番目の山である。さらにまた太陽のただ射す所即ち御蔭山とも呼ばれ、それに因んで社名ともなつた。……玉依媛命・賀茂建角命、二柱の荒魂を奉祀している。……

陽の射す明るい所に出たのでほつとして、辺りを見まわすと、下の方から桂葵の木が一株だけ伸び上がって、小さい葉が光っている。山はよく手入れされているらしくて、下生えがそれほど密生していない。花の咲くツツジなどは一本もなく、ほかに色のある花は見当たらない。石段を降りて帰る道でよく気をつけてみると、緑がかった白のケシ粒のような花のかたまりをつけたやさしい木があつた。山アジサイの一種だろうと思つて、帰つてから調べたら、小アジサイとか柴アジサイなどという花らしかつた。

登る時は、先がわからないので不安だったが、帰りは元氣よく降りてきた。山を出ると先ほどの人に出会つて「行つてきまりましたか、こじんまりした、なかなかええところでしたやろ」と声をかけられて、またほつとしてお礼を言つた。

御蔭神社の現在の社殿は、元禄六年（一六九三）に立て替えられたものだといふことだけれど、この神が祀られたのは二四〇〇年も前だといふから、西暦以前、弥生文化の生れた頃になるのだろうか。想像もおよばない遠い昔で

ある。

いま、何か告げようとしておられることはないだろうか、もう一度、神山を仰ぎ見たが、神々はひっそりと茂みに沈んでその辺りさえはつきりしない。新緑の山々に和して際立つこともなく静かである。その足もとを洗う高野川だけがコトコトと岩を乗り越えて流れている。去りがたい思いで山の前に立っていたが、もうあたりに人影は見えなくなった。吊り橋まで引き返してみると、流れに釣り糸を垂れる人がひとり、無人の駅に山帰りの人がちらほら、人待ち顔の電車がドアを開けて止まっていた。ほかに仕様もないので、ぼんやりしながら帰ってきてしまったが、古木が枯れて、糺の森が衰えたと言われる今、神は何を示しておられるのか、わたしはもう少しゆっくりと山を見つめていたかった。

大 白 牛 車 一法華經巡礼 471 1990.5.28. 原 田 憲 雄

「譬喩品」の長行、すなわち散文の部分の、シャーリプトラに呼びかけて釈尊の語る言葉の続きである。

3-23. また他の衆生は、一切知や、仏知や、自然知や、師なくして得る知をもとめ、多くの人の幸福のため、多くの人の安楽のため世間を憐れみ、神や人、大衆の利益のため、幸福のため、安楽のため、すべての衆生を完全に涅槃させるために、如来の知と、力と、自信を覺ろうとして、如来の教誡に注意する。かれらは大乘を求めて三界から出離するといわれる。それゆえかれらはボサツ大士とよばれる。それは、あの燃える

家から他の処へ、子どもたちが牛の車をもとめて走り出るようなものである。

apare punaḥ satvāḥ(¶:) sarvajña-jñānaḥ buddha-jñānaḥ svayambhu-jñānaḥ anācāryakaḥ jñānaḥ
ākāṅkṣamāṇā bahu-jana-hitāya bahu-jana-sukhāya lokānukampāyai mahato jana-kāyasārthāya hitāya
sukhāya devānāṃ ca mauṣyāṇāṃ ca sarva-satva-parinirvāṇa-hetos tathāgata-jñāna-bala-vaiśārād-
yānubodhāya tathāgata-śāsane 'bhivjujyante / ta ucyanṭe mahā-jānaḥ ākāṅkṣamāṇās tṛaidhātukān
nirbhāvanti / tena kāraṇenocyante bodhisattvā mahā-sattvā iti / tad-yathā 'pi nāma tasmād ādī-
ptād agārād anyatare darakā go-ratham ākāṅkṣamāṇā nirbhāvitaḥ ||

3-24. たとえは、シャーリプトラよ、あの人は、あの子どもたちがその燃える家から逃げ出すのを見て、安全に、
首尾よく免れ、心配いらなくなったことを知って、じぶんは大きな財産のあることをわかまえているので、
子どもたちにただ一つの広大な乗物を与えるようなものだ。そのように、シャーリプトラよ、如来・尊敬さ
れるべき・正しく覺ったひとまた、見るのだ、幾千万多数の衆生が三界から脱出し、苦しみ・恐れ・驚
き・禍いから離脱し、如来の教誡の門を通過して逃げ出し、すべての恐れ・禍いの危険からこがり出て、
安楽に到達したのを。そうして、シャーリプトラよ、そのとき如来・尊敬されるべき・正しく覺ったひと
は、大きな智恵と力と自信の土蔵が、豊かであることを知っており、かれらのすべてがじぶんの息子であ
ることを考え、仏乗だけで、衆生を、完全な涅槃に到達させる。衆生のそれぞれにとってのてんでの涅槃
を説くのではない、すべてを如来の完全な涅槃、大いなる完全な涅槃によって涅槃させるのだ。また、そ

これらの三界から脱出した衆生に対し、如来は禪定・解脱・三昧・平安という聖なる最高の安樂、//楽しいおもちゃ//を与えるのだ、すべて一つの種類の。

lad-yathā 'pi nāma śāriputra sa puruṣas tām kumārakāṃś tasmād ādīptāgārān (W: ādīptāgārān)
nirbhāvitān dr̥ṣṭvā kṣema-svasṭibhāṃ parimuktān abhayapṛāptān iti viditv 'ātmānaṃ ca mahā-dha-
naṃ viditvā teṣāṃ dāraṅkāṅāṃ ekaṃ eva yānaṃ udāraṃ anuprayacchet evaṃ eva śāriputra tathāgato
'pi arhan saṃyak-sambuddho yadā paśyaty anekāṃ satlva-kolīś traiduhātukāl parimuktā duḥkha-bh-
aya-bhairavopadrava parimuktās tathāgata-śāsane (W: śāsana)-dvāreṇa nirbhāvitāṃ parimuktāṃ sa-
rva-bhayopadrava=kāntāreḥḥyo nirvṛti sukha=prāptāṃ/ tām etāṃ-śāriputra tasmīn samaye tathāgato
'rhan saṃyak-sambuddhaṃ prabhūto mahā-jñāna-bala-vaiśāradya-kośa iti viditvā sarve caite mama-
iva putrā iti jñātvā buddha-yānenaiva tām satlvān parinirvāpayati / na ca kasya-cit satlvasya
pariyātmikāṃ parinirvāṇāṃ vadati / sarvāś ca tām satlvāṃś tathāgata-parinirvāṇeṇa mahā-parin-
irvāṇeṇa parinirvāpayati / ye cāpi te śāriputra satlvās traiduhātukāl parimuktā bhavanti teṣāṃ
tathāgato dhyāna-vimokṣa-samādhi-samāpattīr āryāni parama sukhāni kṛtānakāni (W: kṛtānakāni)
ramaṇīyakāni dadāti sarvāṃy etāṃy eka-varṇāni /

3-25. それはたとえば、シャーリプトラよ、あの人のことばが嘘とにならないようなものだ、あの子どもたちに三つの乗物を示しておきながら、ただ一つの大きな乗物、七宝造りの飾りでかさった同じ形のじつに立派な

乗物だけ、無上の乗物だけを、子どもたちのすべてに与えたからといって。ちょうどそのように、シャーリプトラよ、如来・尊敬されるべき・正しく覺ったひとが、嘘つきとはならない、先に巧みな方便として三乗を示しながら、後に大乘によって衆生を完全に涅槃させたからといって。なぜなら、如来は、シャーリプトラよ、豊かな知と自信の土蔵・穀倉を備え、すべての衆生に一切知者の知ともなる法を説くことができるからだ。このような次第で、シャーリプトラよ、知られるべきだ、巧みな方便と知をつかつて、如来は、ただ一つの大乗を説くのだと。

tad-yathā pi nāma śāriputra lasya puruṣasya na mṛsā-vādo bhaved yena trīṇi yānāny upadarśayitva tesāṃ kumārakāṇāṃ ekaṃ eva mahā-yānaṃ sarveṣāṃ dattaṃ sapta-ratna-mayaṃ sarvālakāra-vibhūsitam eka-varṇam evodāra-yānaṃ eva sarveṣāṃ agra-yānaṃ eva dattaṃ bhavet evam eva śāriputra tathāgato 'py arhan samyak-sambuddho na mṛsā-vādī bhavati yena pūrvam upāya-kausālyena trīṇi yānāny upadarśayitvā paścān mahā-yānenaiiva sattvān parinirvāpayati / tat kasya hetoḥ / tathāgato hi śāriputra prabhūta-jñāna-dala-vaishāradya-kośa-koṣṭhāgāra-samasnvāgataḥ pratibalaḥ sarva-satlvānāṃ sarvajña-jñāna sahaḡataṃ dharmam upadarśayitum / anenāpi śāriputra paryayeṇaiiva veditavyam / yathopāyakosaraya (W. yathopāyakausaraya)-jñānābhinirhārais tathāgata ekaṃ eva mahā-yānaṃ deśayati #

これで「譬喩品」の長行は終り、ついで韻文で長行を要約・補足する重頌が展開するが、そのまゝに。

「火宅の譬喩」は、子どものころから繰り返し愛読したものだけれど、その読み方は感性的で、『法華経』の論理をつかんではいなかったようである。燃えさかる家から子どもたちを導き出そうとする父親のような仏の慈悲の広大さに感動はしても、父親がすでに危険を脱した子どもたちに、それぞれが好む鹿の車、羊の車、牛の車ではなく、一様に大白牛車を与えたこと、そのように仏が、二乗ないし三乗ではなく、仏乗という大きな一乗を、なぜ与えようとするのか、わたしには、じつのところ呑み込めていなかった。「譬喩品」が語るように、危険を脱したのだから、おもちゃを与えなくても、父親は子どもたちに対して愛情をもたなかったことにはならない。それぞれの欲しがる車を与えれば、同じ形の車でなくても嘘をついたことにはならず、誠実を疑う理由は生じない。それぞれの欲しがる物を与えればよいではないか。いくらよいものでも、同じ大白牛車の押し付けは、行きすぎではないか。子どもの自由意志を伸ばす教育には逆行するのではないか。わたしのなかでの納得せぬ気持ちを、あらっばくひきだせば、以上のようなことになるだろう。あやふやな気持ちから引きずりだした項目が粗末なのは、われながらあきれるが、粗末な項目でも目の前に据えてみると、「譬喩品」をうけとるこちらの気持が、論理としてかたがついていないのに気づく。ほしがるものを与えるのは、愛であることもあるが、へつらいであることもある。ほしがる子どもの欲が、当然であることもあれば、そうでないこともあるからである。自由意志といっても、無知から解放されたいという自由意志もあれば、麻薬の昏睡に囚われたいという自由意志もある。麻薬の昏睡に囚われたいというようなのは自由意志ではないという反論が出ようが、こんにちの日本で流通している言葉の様相からいって、その反論は通りにくい。しかし反論はまちがっているのではないだろう。「自由」

は、いったんに拘束・制限からの解放をさすのであって、麻痺の昏睡に囚われるのは拘束そのものだからである。しかし昏睡に囚われたい人々がげんにたくさんいて、かれらは昏睡に囚われる自由を求めている。こんなふうに言うとは他人事みたいだが、わたし自身、「一大事」の解決に努力するよりも些事に囚われるほうを好んでいるかの日々を送っていると自覚する。それは今の日本のわたしの実情だが、程度の差こそあれ、今という時間、日本という空間に限定されない、人間に広くみられる傾向なのだろう。「自由」という言葉ひとつとってもなかなか定義しにくく、せつかく与えた定義も、人々はそれに拠って言葉を使おうとはしない。

釈尊は、すべてのごとは思いのままにならず、老いて死んでゆくことを見、その原因を突き止め老死からの解放・自由を求めて出家修行した、といわれる。そうして、思いのままにならず苦惱の塊であるのがこの世の常態であり（苦諦）、苦を集め起こすものは無知・欲望・執着であり（集諦）、執着を断つことが苦を滅ぼす覺りであり（滅諦）、その方法としては八つの正しい道（正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念・正定）を修める（道諦）という四諦をさとして仏となった。3-22.で「四つの聖なる真理」と訳したのはこの四諦。四諦をさらに精密に時間の系列で考察したのが十二因縁であろう。無明（無知）を縁として行（形成力）が生じ、行を縁として識（識別）、識を縁として名色（心身）、名色を縁として六処（眼・耳・鼻・舌・身・意）、六処を縁として触（接触）、触を縁として受（感受）、受を縁として愛（欲望）、愛を縁として取（執着）、取を縁として有（生存）、有を縁として生（出生）、生を縁として老死が成立すると見るのが、十二因縁の順観であり、無明が滅すれば行が滅し、行が滅すれば識が滅し、識が滅すれば名色が滅し、名色が滅すれば六処が滅し、六処

が滅すれば触が滅し、触が滅すれば受が滅し、受が滅すれば愛が滅し、愛が滅すれば取が滅し、取が滅すれば有が滅し、有が滅すれば生が滅し、生が滅すれば老死が滅すると見るのが、逆観である。3-22.で「因縁を覺ろうとして」という因縁は、十二因縁を指す。釈尊は十二因縁を順観し、逆観して、仏となった。苦は世間の常識によれば、常に存在する姿ではあろうが、正しく觀察すれば原因があり、その原因から生起する。苦、だけではなく、なにごとにも、原因・結果をみとめないのを「断見」というが、釈尊の知見は断見を離れている。人に苦惱をもたらす十二の因縁のそれぞれが、しつこく、したたかなものではあるが、人にとってどうにもならない永遠不変の存在ではなく、順次に前のものを縁として現れる幻のようなものに他ならず、人が決意して無明を滅ぼすならば、順次にそれに次ぐ因縁は滅びる。その見解は、世界を常住不変とする宿命論の「常見」から離れているのだ。釈尊はこの知見によって、平安に達した。この平安を涅槃という。それは広大ではあるが、ただ釈尊ひとりの平安であった。釈尊の知見は、まったく例のない独創であったから、語っても他の人に理解されないだろうことは、釈尊には分かっていた。しいて語れば論争が起こって、平安は失われるだろう。だから語ろうとはしなかつた。しかしこの知見に達するまでの苦惱をかえりみ、同じ苦悩にあえぐ人たちのことを思うと、おのれを得た平安を分かち与えたくなつた。このジレンマから、語ろうと決意するまでの、釈尊の心の推移を劇的に描くのが、先に紹介した「梵天の勸請」であり、「方便品」の「三止三請」であろう。

釈尊が語ろうと決意したことは、おのれの得た平安、すなわち涅槃を、捨てる決意をしたことなのだ。多くの人々を涅槃させるためには、おのれの知見を語らねばならぬ。語ればおのれの平安は失われるが、平安ではない

多くの人々の苦惱を傍観する苦しみは断ち切ることにはできる。個人の平安を失うことによつて到達するこの平安こそ眞の平安であり、完全な涅槃であるだろう。人々に対する共感同悲から、おのれの目的とした平安を捨て、涅槃を捨て、しかも平安に到達し涅槃に到達すべき知見を説き続ける。この矛盾を矛盾ではないものとし、人々にもまた おのれと同じように、平安を捨てることを平安とする道を歩み続けよと説くのが、声聞乗でも独覺乗でもない仏乗であり、一乗であり、大乘であるのだろう。

バラモン出身のシャーリプトラが釈尊の弟子になったのは、すでに釈尊の弟子となつていたアシュヴァジットの托鉢する姿にうたれて、誰を師とし、如何なる教えを学んでいるか、とたずね、アシュヴァジットが「釈尊の弟子となつて間がないのでうまく言えないが」とことわりながらも、縁起の説を学ぶ、と語つたことは、本稿の(8)で紹介した。この話は、釈尊を信じ、釈尊の教えをたもち、人に伝えるならば、その人はまだ釈尊の教えを十分に理解し、覺り、体現しえていなくても、人が釈尊の知見に入る手助けをすることができるといふ機微を物語っている。釈尊の知見、すなわち仏知見を、人々と共有したいと決意することが「発菩提心・ほつばだいしん」であり、菩提心をおこした者は、まだ何も覺らず、迷いのうちに悩む者であっても、そのひとをボサツというのは、以上のような論理にささえられているからであろう。

この感想は、粗瀆で、『法華経』の論理と感性を、正確にとらえ、伝え得ているかどうか、おぼつかないが、いまのわたしの理解である。理解に誤りがなくとも、それを日々に身に確かめて行くのが釈尊の教えを信じる者の道であろう。とぼとぼとした足どりではあつても歩いてゆくほかはない。

中国の詩人と仏教 (七)

1930.6.3.

原田憲雄

九、曹操、曹丕

「曹操(そうそう)は、人々に「奸臣逆賊」の典型、「悪玉」の代表とされている。歴史上の曹操は果たしてその通りだろうか。二十年前、中国の学界はこの問題を本格的に取り上げた」これは一九七九年に香港で出た『曹操論集』という本の裏表紙の広告文の一節です。

「二十年前」というのは、一九五九年一月二五日の『光明日報』に載った郭沫若の「蔡文姬の《胡笳十八拍》について」という論文をきっかけに、同年七月まで中国の新聞や雑誌で巻き起こされた曹操評価の論争をさし、関係論文約一五〇の中から三七篇を選び、一九六〇年、北京で『曹操論集』として刊行されました。香港で出たのはその再刊本なのです。

この論争で「悪玉」曹操は名誉回復し、一九六六年から一〇年間にわたる「文化大革命」中には「法家思想の英雄」として讃美され、毛沢東が死に「四人組」が退治された後も、曹操評価は悪化してはいないようです。

世間での評価が変化しても、わたしとしてはあまり好きにはなれない人物ですが、かれは『三国志』の他の英雄たちと違って詩人であり、しかも詩人としての力量からすると、後漢・三国を通じて最高だろうと思います。彼の息子の曹丕(そうひ)、曹操(そうしよく)、曹植(そうしよく)、と読む人もある)もすぐれた文学者で、孫の曹叡(そうえい)もかなりの詩人でした。文学史では一般に曹操よりも曹植を高く評価するようですが、批評家によっては曹操の方を上とする人もあります。その詩は例えば「短歌行」

対酒当歌

酒を手に 歌うがいい

人生幾何

人生はいくばくか

譬如朝露

たとえば 朝の露

去日苦多

すぎ去る日びの多いこと

慨当以慷

たかぶる心はたかぶらせよ

憂思難忘

憂うる思いはたちがたい

何以解憂

なにでもって憂いを解くか

唯有杜康

まずは一杯やるだけだ

青青子衿

さえさえ きみの衿（えり）

悠悠我心

ゆるゆる わたしの心

但為君故

きみに会いたいばかりに

沈吟至今

いままで沈んでなげいていた

呦呦鹿鳴

ゆうゆうと鹿は鳴き

食野之苹

野の草を食う

我有嘉賓

よいお客がおいでになれば

鼓瑟吹笙

琴をひき 笙を吹こう

明明如月

きらきら 月のようなかた

何時可掇

いつ あなたに会えるか

憂從中来

憂いは中（うち）より来たり

不可断絶

たちきることができぬ

越陌度阡

野こえ 山こえ

枉用相存

せひおたずねし

契濶談讌

こころこめて宴（うたげ）しよう

心念旧恩

かつての友情をおもうのだ

月明星稀

月明らかに 星稀に

鳥鶴南飛

カササギが南に飛ぶ

繞樹三匝

樹をめぐる まためぐる

何枝可依

どの枝に身を寄せる気か

山不厭高

山は高いほどよく

海不厭深

海は深いほどよい

周公吐哺

周公（しゅうこう）をみよ 食事さしおき面接し

天下為心

かくて 天下の人みな心を寄せた

『詩經』の「小雅」あたりの詩にましても通りそうなくらい調子の高いものです。「聖人の周公を気取って、

世をあざむくも甚だしい」といった敵しい批評もありますが、反面からいえば、憎たらしいほどうまい、ということになりました。

曹操は一八四年に起こった道教徒の革命戦争「黄巾の乱」を討伐して名をあげました。この戦争で、武器もろくに持たず戦術・戦略も知らぬ農民の集団が、信仰によって固められると、どれほど手ごわいものになるかを痛感したのでしょう。一九六年、皇帝を迎えて、中原の実力者となると、儒教によって官吏を規制し、汚職を厳禁し、儒教以外の宗教・信仰を禁止し、民間の祠廟を破壊しました。道教が当面の目標だったでしょうが、仏教も禁止の対象に入ったはずで、だからこそ安世高や支婁迦讖のような高僧も、笮融らの信者集団も、南方に逃れたのでしょう。黄巾の残党は蜀（四川）に行つてそこで教団を再建します。仏教徒のなかにも蜀に行つた者、あるいは中央アジアに逃れた者もいるでしょうが、明らかではありません。

曹操は、呉の孫権と結んでは蜀の劉備を討ち、劉備と結んでは孫権を討ち、勝つたり負けたりの戦争を続けながら、やがて自ら皇帝となるべき準備を着々と進めました。かれは軍陣のなかでも書物を手離さず「若い時に学問好きで思索する者でも、年をとるにつれてその習慣を忘れる。年とっても勉強しているのは、おれと袁伯業くらいのものだ」といったことを、子の曹丕が書き留めています。兵法の書『孫子』の注釈を書いているほどですから、学者としても相当なものです。好き嫌いを棚にあげれば、『三国志』の英雄たちのうちでもやはり曹操が最高の秀才でしょう。しかしおもしろいもので、最高の秀才のかれが志を遂げず皇帝とはなれずに、二二〇年に死にます。六十六歳でした。長男の曹丕があとをつぎ、後漢の皇帝から譲りを受けて帝位に登ります。これが魏

の文帝で、洛陽を首都としました。次のとしの二二一年、劉備がみずから帝位につき、成都（四川成都）を都としますが、つぎの年に亡くなります。これが蜀漢の昭烈帝です。そうして二二九年、孫権もまた帝と称し、建業（江蘇南京）を都とします。呉の太帝です。これで完全に天下が三分したわけです。

曹操は生前は皇帝になれませんでした。子の曹丕が皇帝になると、父親に「武皇帝」という称号を贈ります。それで今日でも曹操のことを「魏の武帝」、略して「魏武」ともいいます。

さて、文帝曹丕には「折楊柳」と題する詩があります。

西山一何高 西山のなんと高いこと

高高殊無極 高々ときわまりない

上有両仙僮 上に住んでるふたりの仙童

不飲亦不食 飲みもせず食いもせぬ

与我一丸藥 わたしにくれた丸薬一粒

光耀有五彩 きらきらと五色にかがやく

服藥四五日 服薬し四五日たつと

身体生羽翼 体には翼が生え

輕拳乘浮雲 ふうわりと雲のうえ

倏忽行万億 たちまちに万里とび

流覽觀四海

見てまわる四方の海

茫茫非所識

茫々として何処ともしれず

彭祖稱七百

彭祖（ほうそ）の年は七百歳

悠悠不可原

などとはいうがあやふやで

老聃適西戎

老子は西にお出でとやら

于今竟不遷

今になっても帰ってこぬ

王喬假虛辭

赤松子（せきしようし）といい王喬（おうきょう）といい

赤松垂空言

仙人はみなそらごとさ

達人識真偽

達人は真偽を見分けるが

愚夫好妄伝

ばかはデタラメが大好きで

追念往古事

なつかしがる 昔々の

憤憤千万端

くだらない百万だらを

百家多迂怪

思想家もおおむねインチキだ

聖道我所観

わたしが取るのは 聖人の道

この詩が示すように、文帝もまた、父の曹操とおなじく儒教的合理主義者で、道教やその他の民間信仰も嫌いでしたから、たぶん、仏教の僧を近づけたり、仏像を祀ることを許したりはしなかったでしょう。